

要 旨

(Abstract)

和文要旨

英文要旨

和 文 要 旨

論文題目：「現代日本語の受身文の体系
—意味・構造的なタイプの記述から—」

氏 名： 志波 彩子（塩澤 彩子）

従来、日本語の受身文については膨大な研究の蓄積があり、その中で様々な受身文タイプの存在が指摘されてきた。しかしながら、それぞれの受身文タイプの体系内への位置づけについては、ほとんど明らかにされていない。本研究は、4つのジャンルのテキストデータから現代日本語の受身文タイプを可能な限り取り出し、それぞれのタイプ間の相互関係を見ることで、現代日本語共時態の受身文体系を網羅的に記述した。

分析の対象としたデータは、小説の会話文、小説の地の文、新聞の報道文、評論文という4つのテキストから抽出した受身文である。抽出されたすべての受身文について、その主語、動作主、動詞の語彙的な意味、テンス・アスペクトといった文の構造的特徴を分析し、従来の研究で指摘されてきた受身文に加え、様々な受身文タイプを取り出した。本研究は、こうした1つ1つの受身文タイプは、異なる意味・機能を持っており、その意味・機能は、それぞれの受身文の構造的特徴によって支えられていると考える。こうした内容=意味と形式=構造をそなえた文のタイプのことを、意味・構造的なタイプと呼んでいる。意味・構造的なタイプとは、文が繰り返し発話されることにより抽象化・一般化した、構造の型=パターン（シエマ）のことであり、1つの言語単位である。

また、取り出された1つ1つの意味・構造的なタイプが、他の受身文タイプとどのような相互関係をもっているかを考察した。すなわち、どのような構造的な条件のもとで双方が近づき、またいずれのタイプ同士が体系上近接しあうのかということである。「体系」とは、こうした、それぞれのタイプの間の相互関係のネットワークにほかならないのである。

本研究では、まず、受身文をその主語と動作主の有情・非情の別によって、4つの意味・構造的なタイプに分類した。それぞれ、有情主語有情行為者受身文（「私は和夫にたたかれた」）、有情主語非情行為者受身文（「私は育児に悩まされている」）、非情主語一項受身文（「駅前にビルが建てられた」）、非情主語非情行為者受身文（「水面が陽に照らされている」と名づけた。非情主語一項受身文は、非情主語有情行為者受身文に相当するが、同一節内に行行為者が現れることがほとんどなく、多くの場合、不特定であり、関心が払われていないため、これを非情主語一項受身文と名づけた。この4つの大きなタイプを4大分類と呼んでいる。次に、これらの4大分類について、状態変化動詞、位置変化動詞、接触動詞などといった、動詞の語彙的な意味を基盤にした構造のサブタイプを取り出し、全部で63の細かいサブタイプを立てた。

さらに、63の細かいサブタイプを、動詞のより大きな意味グループおよびテンス・アスペクトの違いなどによって、15のタイプにまとめあげた。これを15中分類と呼ぶ。

15中分類については、まず、有情主語有情行為者受身文のサブタイプを、変化動詞による〈被変化型〉、無変化動詞による〈被動作型〉、認識動詞による〈被認識活動型〉、態度動詞による〈被態度型〉という、動詞グループを基盤にした4つの構造的タイプにまとめ上げた。

表わす無意志自動詞文に体系上近接していると考えられる。次の自動詞文に現れている二格も非情物の原因である。

(148)和夫は〔自分の性癖に／人員の不足に〕悩んでいる。(cf.悩まされている)

この種の受身文タイプが自動詞文に近接していることは、対応する能動文が不自然であるか、成立しないという構造的特徴にも表われている。「気圧される、惹かれる、つられる、ほだされる、うなされる」などの動詞は対応する他動詞が存在せず、ほとんど自動詞化している。

また、〈心理・生理的狀態型〉は、通常の動作動詞が要素となることも多く、「押される、打たれる、引かれる、縛られる」などの動詞は、本来、接触動詞であるが、二格に非情物の原因をとることで、有情主語有情行為者受身文の〈被動作型〉から〈心理・生理的狀態型〉へ移行する。

(149)和夫は良子に〔打たれた／押された〕。(被動作型のサブタイプ)

(150)和夫は良子の熱意に〔打たれた／押された〕。〈心理・生理的狀態型〉

「追われる、迫られる、駆られる、つきまとわれる、見舞われる、おそわれる」など、多くの接近動詞が非情物の二格と共に起することで、有情主語有情行為者受身文の〈被態度型〉から〈心理・生理的狀態型〉へ移行する。

(151)和夫は良子に〔追われた／つきまとわれた〕。(被態度型のサブタイプ)

(152)和夫は〔仕事に追われた／漠然とした恐怖につきまとわれた〕。〈心理・生理的狀態型〉

さらに、「あたえられる、うばわれる、とられる」などの所有変化を表わす基本的な動詞でも、主語に立つ有情者の心理・生理を表わす名詞がヲ格に立つことで、有情主語有情行為者受身文の〈被変化型〉から〈心理・生理的狀態型〉へ移行する。

(153)和夫は両親に自分の部屋を〔あたえられた／うばわれた〕。(被変化型のサブタイプ)

(154)和夫は彼女の態度に〔違和感をあたえられた／心をうばわれた〕。〈心理・生理的狀態型〉

このような、動作動詞による受身文の〈心理・生理的狀態型〉への移行は、一方向的な移行関係であると考えられる。つまり、心理・生理的狀態とは、物理的動作に比べて抽象的な事態であるため、心理・生理的狀態動詞が物理的動作を表わす受身文に移行するという関係は存在しない。また、こうした動作動詞による〈心理・生理的狀態型〉の多くは、対応する能動文を持っていない。すなわち、こうした移行関係は、受身文の体系に特有のものであると言える。

以上述べた移行関係を簡単に図にまとめると、次のようになる。

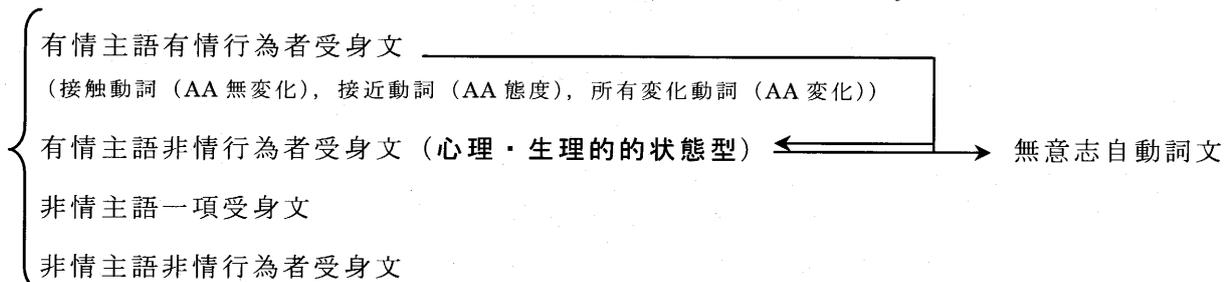


図 11：心理・生理的狀態型と他のタイプとの相互関係

また、記述の中で、主に受身文の主語の有情・非情の別に関するいくつかの重要な点が明

らかになった。例えば、無変化動詞である接触動詞（「たたかれる」など）の受身文は、有情主語の受身文では頻度が非常に高いのに対し、非情主語の受身文では全テキストを通じてほとんど用例がなかった。これは、変化局面とその結果をふくまない接触動詞が、動作主を背景化して行為の実現（変化）の局面を際立たせる非情主語一項受身文の要素としてなじまないためと考えられる。

さらに、4つのテキスト別に各タイプの割合を統計し、グラフ化した。これにより、それぞれのテキストの特徴と受身文タイプとの関係が明らかになった。

本研究は、動詞の語彙的な意味に基づいて立てた文タイプ間の相互関係（体系のネットワーク）を分析するという、従来の研究には見られない、いわば語彙・構文論的な方法論をとった。このような語彙・構文論的とも言える研究は、今後、様々な言語調査をより正確に、厳密に進めるための理論的支えとなる可能性を秘めている。例えば、本研究でも行ったような、テキストジャンル別の文タイプの分布の調査に加え、通時的な体系の比較や他言語との対照においても、言語の実態をきわめて正確に提示できる道具立てとなるだろう。